

幼児と絵本に関する研究（2） — 1歳児・前半期の場合 —

足立 悦男*・足立 茂美**

Etsuo ADACHI, Shigemi ADACHI
Picture Books in the Early Years — A Study
of a Child One Years Old

〔キーワード：1歳児・前半期，絵本享受，言語習得〕

はじめに

1歳児は、絵本とどのように関わり、絵本をどのように受けとめていくのであろうか。それが人との関わりや言語習得及び知識の獲得にどのように結びついていくのであろうか。本研究は、1歳児・前半期の絵本享受の実態を、長女M児（昭和52年6月25日生れ）の育児記録をもとに具体的に報告したものである。

なお、M児の0歳期における絵本享受の実態については、「幼児と絵本に関する研究—0歳児の場合」として、すでに『大阪教育大学紀要』（第36巻 第2号）に発表した。本稿は、その事例研究に続くものである。

研究の目的

記録者（茂美）は、恩師・野地潤家先生ご夫妻の研究『幼児期の言語生活の実態』I～IV（文化評論出版 1973～1977）に学びながら、長女みぎわ（昭和52年6月25日生れ。以下M児と記す）が生まれると、子どもが言葉を習得していくその現場に立ち会っている母親の目で、M児の成長の様子や言語生活のありのままを、育児記録としてつけはじめた。

野地先生ご夫妻の、ご長男澄晴さんの0歳から5歳までの言語生活の実態を採集した膨大な記録は、一幼児の具体的な言葉の生活の記録を積み重ねることによって、

言語発達の普遍的な筋道や、心の成長のありようを浮き彫りにすることを可能にした。幼児教育の研究者にとつては、宝の山のような基礎研究であった。

私の育児記録は、野地先生ご夫妻の記録には比べるべきもないが、我が子の成長の記録をこころがけることで、私自身の子どもをとらえる目を確立したいという思いが強かった。そこで、できるだけM児の言葉や行動やその場の様子を、客観的に観察して、くわしく記述するよにした。もちろん、家事・育児・雑事の合間をぬっての記録であるから、研究資料として十分であるかどうか自信はない。ただ、0歳期、1歳期の育児記録の中から、絵本享受に関する箇所を拾い出してみると、一幼児の連続的、具体的記録をとおして、この年齢の子こどもたちの絵本との関わり方や、その可能性が見えてきたことは確かである。

本稿では、「1歳児・前半期の場合」として、1歳0か月から1歳5か月までの記録を中心に、できるだけくわしくM児の事例を報告し、言葉を習得しはじめたいわゆる「一語文期」の子こどもと絵本との関わりや、この時期の子こどもへの絵本の読み聞かせのありようなどについても考察を加えたい。

M児の0歳期における絵本享受の実態(概要)

1歳期の実態と考察に入る前に、0歳期の実態と考察の結果について述べておきたい（前稿「幼児と絵本に関する研究—0歳児の場合」『大阪教育大学紀要』第36巻

* 島根大学教育学部国語科教育研究室

** 鳥取県立保育専門学校

第2号)。記録者(茂美)は、M児に、5か月の半ば頃から絵本を見せはじめ、その後、毎日のように絵本を読み与えた。もちろん、子どもの発達に合わせて、0歳児でも興味や関心をもって絵本を楽しめるよう、以下のような配慮や工夫をした。

①少なくとも1日1回は一緒に見る。同じ絵本を何度も繰り返し見る。

②絵本の文章どおりの読み聞かせはまだ早いので、日常生活の中でM児が体験したり、見たり聞いたりしたこと、絵本の絵や内容が結びつくような語りかけをした。また、この時期の子どもにわかりやすい言葉(いわゆる育児語)で語りかけた。(犬の絵はワンワン、猫の絵はニャーンなど)

③子どもが喜ぶように、また、イメージ化しやすいように、語りかける言葉にリズムやメロディーをつけたり、動作をつけたりしながら語りかけた。絵本を絵本として型どおりに読み与えるのではなく、絵本を介してあやす、語りかける、遊ぶといった感覚で絵本を与えるようにした。

④絵本の絵を見ながら、絵本の内容とは関係なく、その絵に関連した童謡などもよく歌って聞かせた。(鳩の絵がでてくると、ハトポッコの歌、蝶の絵がでてくるとチョウチョウの歌など)

⑤絵本は、いわゆる「赤ちゃん絵本」と呼ばれる、乳幼児にも扱いやすい小振りですっきりとした装丁のものを選び、自分で持ちたがったら、なめたり、かじったり、破れたりしてもいいから持たせるようにした。また、いつでもM児が手に取って見られるような場所に置いておいた。

以上のような配慮・工夫のもとに、5か月半ばごろから意識的に絵本を与えるようにした結果、10か月頃になると、M児の絵本に対する興味や愛着は強まり、絵本との関わりがかなりしっかりしたものとなった。そして、以下のような行動が観察されるようになった。

①自分から絵本を読んでもらいたがり、絵本を持って来て差し出したり、自分でページをめくりながら読んで欲しそうな態度を示すといった行動をするようになった。要求がかなえられるとたいへん喜ぶ。

②絵本に対する興味や愛着が、他のおもちゃなどに対するそれよりも強くなり、朝起きると一番に絵本を取り出して見ることも多く、泣いたりぐずったりしていても絵本を見せると機嫌がなおったりする。

③絵本を見ながら母親の語りかける言葉や動作をまねしたり、自分から声を出したり言葉を発したりするようになった。11か月を過ぎると、絵本の中に描かれている

登場人物(動物)の動作をまねて、手をふったり、身体を動かしたり、声をあげたり、身体全体で絵本の内容をなぞり、楽しむようになった。

④ページを自分でめくれるようになり、一人でページをめくって、じっと絵本を見ていることもある。

⑤好きな絵本は表紙や背表紙を覚えていて、本の題名を言って持って来るように指示すると、ちゃんと持って来る。

⑥一回読み終わると、すぐにその絵本を差し出してもう一度読んでもらいたがるようになった。

以上のように、M児は、1歳になるまでに、かなり、絵本に親しみ、絵本を読んでもらうのを喜ぶようになっていた。もちろん、1歳になっても、上記のような配慮をしながら毎日のように絵本を読んで聞かせたり、読んでもらいたがるM児の要求に応えたりした。

なお、M児の場合、2歳半になるまで家にテレビがなかった(おこななかった)ので、絵本がいちばん視覚的な興味を引くものであったことも、M児が絵本との関わりを強めていった要因の一つだと思われる。

以上のような0歳期の実態をふまえて、以下、1歳児・前半期の事例の紹介と考察に入ることにする。(なお、記録の中に登場するM児は長女・みぎわ、Eは父親である。)

1歳児における絵本享受の実態—M児の場合 1歳0か月

事例1 <昭和53.6.26(1歳0か月)>

今日、はじめて、絵本の中の絵を正しくさすことができた。『ことばのべんきょう—くまちゃんのいちねん』(かこさとし文と絵、福音館、1971、タテ15cmヨコ15cm以下、『くまちゃんのいちねん』と略して記す)を近所の子どもが読んでいたが、しまい忘れて帰ったあと、M児がすぐにそれを見はじめる。どのページにも、こまごまとたくさんいろいろなものが描かれている。それをあちこち見ているので、「みーちゃん、お花は？」と聞くと、そのページ(6、7ページ)の中の水仙の花をさっと指でさした。同じページにバトカーもかかれているので、「ブーブーは？」と聞くと、バトカーのところへ人指し指をもって行ってさっとひっこめた。バトカーの絵の上に指をおいてしっかりその絵をさし示すのではなく、指先でさっとさしてその指をさっとひっこめてしまうのであるが、聞かれたものを正しくさすことができていた。そのあと、M児が知っているものについて、「モシモシ(電話)はどれ？」(15ページ)、「ウマウマはどれ？」(45ページ)などと聞いてみると、どれもたくさんこまごました絵の中

からさがし出して、さし示すことができた。

事例2 <昭和53.7.7 (1歳0か月)>

行水の後、お茶を飲ませようと思って、「チャチャあげよ」と言う、「チャーチャ、チャチャチャチャ」とすぐに真似して、テーブルにつかまって立ち、背伸びしてテーブルの上を見る。

夜9時過ぎ。「おっぱいいるの?」と聞くと、「パッ、パッ」と言っていて、急いで台所へ這って来る。牛乳を飲んだ後すこし遊んでいたが、ふとんの上ですわっていた私のところまで、「ネンネン、ネンネン」と言いながら這って来る。自分から「ネンネン」と言ったのははじめて。言葉の意味は前からよく知っていて、私が「ネンネン」と言うとさっとねっころがる動作をしたり、「ネンネン」とオーム返しに言えるようにもなっていた。そして、今日からはじめて自分でこの言葉を使うことができた。

事例3 <昭和53.7.7 (1歳0か月)>

今日もしきりに「ネンネン、ネンネン、……」と言う。眠くない時でも言っている。言えるようになった言葉を繰り返し繰り返し口にするのがおもしろいのか、楽しんでいるような感じがする。

夜9時ごろ。牛乳が欲しくなり、「マンマンマン、マンマンマン……」と言いながら、テーブルにつかまって立つ。「おっぱいが欲しいの?」と聞くと、今度は「パッパッパッパッ」と言う。「マンマ」「オッパイ」と一語ではっきり言うことができず、音の連発になってしまう。「ネンネン、ネンネン……」も同様。有意義音連発期とも言いたいような、喃語の連発とも違う一時期があるようにも思えてくる。おしっこをする時も、「シー(あるいはシッコ)しようね」と言うと、必ず、「シーシーシーシー」と歌うような調子で言っている。

事例4 <昭和53.7.8~7.19 (1歳0か月)>

仕事に追われたり、体調をくずしたりして、この間記録をつけず。M児は、この12日あまりの間に、歩くのもしっかりして、めざましい成長ぶり。「マンマ」と一語ではっきり言えるようにもなった。朝起きるとすぐに台所にいる私のところまできて、「マンマ!」と言う。今までは「マンマンマン、マンマンマン」と音の連発になっていたが、はっきり力強く「マンマ!」と言える。

また、この間、棟方志功の展覧会に行き、求めた図録『棟方版画の世界』(1977, 朝日新聞社、タテ24cmヨコ25cm)の中の「桃太郎」と「金太郎」の絵を見せながら「桃太郎」や「金太郎」の歌を歌ってきかせたのである。それ以来その絵がとても気に入って、私がお歌を歌うと、画集の置いてある本棚を指さして出して欲しがらる。画集をわたすと、自分でめくってそのページを出す。「金太郎」

の歌を歌ってやると、足を激しく動かして拍子を取り、「桃太郎」の歌を歌うと、頭をふりふり自分の服を引っばって見せる。これは、「(きびだんごを)ひとつ私にくださいいな」というところで、私がM児の服を引っばりながら歌って見せたので、それからは、このフレーズのところで必ず自分の服を引っばる動作をする。このところ毎日、一日に何度もこの画集を見て、このようなことをして喜んでいる。

1歳0か月における絵本享受の実態と考察

(この期の記録で、絵本についての詳しいものは〈事例1〉だけである。この時期に言葉が言えるようになったり、歩けるようになったり、そちらのほうの記録が中心になったためと、私が仕事に追われたり体調をくずしたりして途中12日間は育児記録をとっていないためである。)

①〈事例1〉は、満1歳になった翌日の記録である。この日、M児は、はじめて、絵本の中の絵について尋ねられると、その絵を正しくさし示すことができるようになった。

『ことばのべんきょう—くまちゃんのいちねん』は、年中行事や四季それぞれの情景が、実にこまごました絵で楽しくわかりやすく描かれていて、遊びに来る近所の子こどもたちがよく見ていった絵本である。絵が小さすぎるのでM児にはまだ早いと思ったが、読んでもらったがるので、絵を一つ一つ指でさして説明したり、歌を歌ったりして、半月くらい前から楽しみ始めた絵本である。すでに絵本の絵を楽しむことができるようになっていたM児にとっては、こまごました絵であっても一つ一つさし示してわかりやすく楽しく説明してもらおうと、かなり集中して聞くことができた。やがて、私に尋ねられた絵を自分でさし示すことができるようになったのである。〈事例1〉では、まだ自信なさそうに指をさっとひっこめていたが、1か月もたたないうちに、指をしっかり絵の上に置いて、自信をもってさし示すことができるようになっていた。(1歳1か月の〈事例5〉参照)

尋ねられた絵を指で示して答えられるようになったことで、読み手である私とのやりとりに幅ができ、M児の絵本を見る楽しみはさらに強いものになったと思われる。

②M児は、11か月に入って、「キャッ、キャッ」というサルを意味する言葉を初めて言えるようになり(初語の出現)、その後は少しずつ簡単な言葉なら真似して言えるようになった。1歳になったこの時期も、「ネンネ」(寝ること)「シーシ」(おしっこ)「マンマ」(食べ物)「ブー

ブー(自動車)「ポイ」(捨てること)「チャチャ」(お茶)など日々言葉がふえていき、〈事例2〉〈事例3〉に見られるように、発音はまだ不完全で、言葉もその一部分しか言えなかったりするのであるが、この時期からはますます私が語りかける言葉や歌にたいへん興味を示しすぐ真似るようにもなった。

その様子を見てみると、言葉を覚え始めた子どもにとって、言葉を習得していくということは、喜びを伴う、楽しい作業のように思われた。一つの言葉が言えるようになったという成就感、周りの人(とくに母親)がそれを喜び励ましほめてくれるうれしき、自分が言った言葉に対して相手がその言葉どおりに反応してくれたり行動してくれたりして心を通い合わせることができる満足感、あるいは言葉の響きの心地よさやイメージがひろがる楽しさ、こういったことすべてが言葉を意欲的に習得していく支えになるのであろう。M児にとっては絵本を読んでもらう時間は、以上のようなことがたっぷり味わえる時間でもあった。絵本を読んでもらうことが言葉を覚える楽しさや意欲を強めることになったし、また、言葉が言えるようになったことで絵本をもっと楽しめるようになっていった。そのことは、以下の事例の中でさらに詳しく確かめていきたい。

③〈事例4〉の図録はかなり厚いもので、中程の左右のページに錦絵のような桃太郎と金太郎が大きく描かれている。それを見せて歌を歌って聞かせたり、語りかけたりしたら、すっかり気に入って、絵本と同様、本棚から出して自分でページを開いたり、読んで欲しがったりする。この時期の絵本に対する興味や愛着は、絵本のストーリーやテーマよりも、絵その物に対して向けられていることがわかる。そして、その絵本で、読み手がどんな語りかけやどんな行為をしてくれたかもまた大切である。それが自分にとって楽しいとき、この時期の子どもは、その楽しさを何度でも味わいたくて、同じ絵本を繰り返し読んでもらいたがるのがわかる。

1歳1か月

事例5 〈昭和53.8.8(1歳1か月)〉

『ことばのべんきょう—くまちゃんのごあいさつ』(かことし文と絵、福音館、1971、タテ15cmヨコ15cm)を何度も見ると。「ブーブーは?」「くつは?」と聞くと、自動車や靴の絵を、指先をその絵の上に置いて正しくさし示す。くまちゃんが電話をかけている場面(32ページ)で「もしもし」と言ってやると、すぐに右手を耳のところをもっていつて得意げにする。「みいちゃん、かしこいね」

とほめると、すぐに自分の頭をなでてみせる。

事例6 〈昭和53.8.8(1歳1か月)〉

『ぼくのうちのどうぶつえん』(なかにちよこ さく、福音館、1970、タテ20cmヨコ19cm)を取り出して夕食後に見せる。イヌが出ると「ウーン、ウー」と言う。「ワンワン」とは言えない。ハトのページでは、〈ハトポッコ〉の歌を歌ってやると、「ポー、ポー」と歌にあわせて真似をする。チョウチョウが出てくるページでは、「ちょうちょう、ちょうちょう、なのはにとまれ」という私の歌にあわせて、「ター、ター」と楽しそうに一緒になって歌っているつもりである。アリの絵のページをめくると、すぐに自分の額を私の額にコツンとぶつつけてくる。このページのところでいつも「ありさんとありさんがこつつんこ」と歌いながら額と額をコツンとぶつけてやっていたのであるが、今日は、「アリさんよ」と言っただけですぐにこのような動作をする。ネコの絵のページでは、「イヤ—ッ」とか「イエ—ッ」とかいった声をだす。「ニヤーン」と言うつもりなのだが、まだ正しく発音できない。カエルの絵のページでは、「カエルさんがいるよ」と言う、すわったままお尻でピョンと飛び跳ねるような恰好をする。このページを読んでやる時、私は「カエルさん、ピョン、ピョン」と言ってやるだけで、飛び跳ねる動作をして見せたことはない。M児は、近所の子もたちとの遊びの中で、「ピョン、ピョン」というのが飛び跳ねることだと知っていた。それを絵本の中の「カエルさん、ピョン、ピョン」という言葉と結びつけて、自発的に飛び跳ねる動作をしたのである。M児の中で、「ピョン、ピョン」という言葉のイメージが、カエルの飛び跳ねるイメージも加わって、さらに広がったことがわかる。

事例7 〈昭和53.8.15(1歳1か月)〉

本棚から『びよびよ』(谷川俊太郎作、堀内誠一絵、ひかりのくに、タテ20cmヨコ21cm)をひっぱり出そうとして、ぎっしりつまっていて取れないために、泣きだす。近所の子どもたちがその絵本を見ていたのを覚えていて、『びよびよ』だけをひっぱり出そうとする。出してわたしてやると、泣いていたのがすぐに笑い顔になり、「エヘッエヘッ」とうれしそうな声をあげ、読んでもらいたがる。トラックが急停車する場面で、「ギギーッ」と言ってやると、じっと私の口もとを見ている。次のページをめくると、すぐにもともどしてトラックのところを出し、何度も「ギギーッ」と言わせられる。しまいには自分でも真似して、「ジージ」「ジージ」と言う。

事例8 〈昭和53.8.19(1歳1か月)〉

午前中、『かっきくけっこ』(谷川俊太郎作、堀内誠一絵、ひかりのくに、タテ20cmヨコ21cm)を読んでやって

いると、はだしの足先の絵が出てきたので、「大きなあんよ（足の意）ね」と言うと、自分の足の親指をひっぱって見せる。「そう、みーちゃんのあんよよ」と言って、今度は私の足先をつきだして見せると、ニコッと笑って私の足の親指をつまみにくる。そして、私の手をひっぱって、自分の足の先にさわらせるので、M児の足の親指をひっぱって、足を大きく動かしてやると、うれしそうに声をたてて笑う。

夕方、E（父親）が椅子にすわっていると、『かっきくけっこ』を持ってそばに行き、さしだす。Eが「読むの？」と言うと、身体を振って喜ぶ。Eが「あいうえお」と、1ページ目から読み始めると、M児はさっさと自分でページをめくって、はだしの足先のところを出す。Eが絵本に書いてある文章どおりに、「だちづでどどど」と読むと、M児はしゃがみこんで、自分の足にさわると、Eが、「あつ、みーちゃん、あんよわかったの。えらいねえー」と言うと、今度はEの足の先を、なでるようにさわると、「これはおとうちゃんのあんよ」と言うと、M児はしゃがみこんだまま、お尻を上下にゆするようにして、「エエン、フフン」と満足そうな顔をする。

事例9 〈昭和53.8.21（1歳1か月）〉

『およぐ』（なかのひろたか作、かがくのとも、福音館、タテ24cmヨコ22cm）がとても気に入って、朝から何度も見る。「パシャパシャって、およぐのよ」と言ってやると、うれしそうにする。何回か見ているうちに、私が「パシャパシャ」と言うと、うつぶせになって、足をけるように動かす動作をするようになった。

事例10 〈昭和53.8.21（1歳1か月）〉

絵本『びよびよ』を自分で出して、そのまますわりこんでひとりで見ている。声を出しているところがあるので、そつとのおぞくと、次のようなところであった。

・ヘリコプターの絵を見て……「チュバチュバ」（バの音が強くきこえ、チュはききとりにくい。私は「シュバシュバ」と読んで聞かせている。）

・金槌で釘を打ちつける絵を見て……「トゥトゥ」（「トントン」と読んでやっている。）

・トラックの絵を見て……「ジジジー、ジジジー」（こは「ギギーッ」と読んでやっている。）

1ページ1ページ自分でめぐりながら、そのページの絵を見て、ひとり声を出して楽しんでいる。すでに絵本を読んでいるといつてよいのではないかと思った。

1歳1か月における絵本享受の実態と考察

①絵本の絵の所在について尋ねられると、指でしっか

り押さえて示すことができる（〈事例5〉）。1か月前は、自信なさそうにさつと指をひっこめていたが、もう危うげがない。

②絵本の絵を見て、そこに描かれている内容を、動作や声や歌などでなぞる行為が、かなり自発的になった。たとえば、〈事例5〉の電話をかける動作、〈事例6〉のアリとアリがこつつこをする動作、同じくカエルが飛び跳ねる動作、〈事例9〉の泳ぐ動作などは、これまでのように私から促されたり、私がやって見せるのを一緒にやるのではなく、私の言葉（「もしもし」、「アリさん」「ピョン、ピョン」「パシャ、パシャ」など）を聞いただけで、自分からして見せた動作である。

③読んでもらっておもしろかったところは、繰り返しページを開き読んでもらいたがる。0歳期にもすでに見られた行為ではあるが、〈事例7〉に見られるように、自分もその言葉を覚えよう、一緒に言おうと努力している。ただ単におもしろいから何度も読んで欲しいというよりも、言葉も習得しようとする意欲的意志的要求になってきたことに注目したい。言葉が言えるようになったこの時期は、絵本に書かれているそのままの言葉で読み聞かせるのではなく、子どもにも言いやすい言葉で、真似したくなるような楽しい言葉で、繰り返し語りかけることが大切だと思われる。

④〈事例8〉のように、言葉と絵と実物とを照合することに興味を示し始めた。「あんよ（足の意）」という言葉と、絵本の中の足の絵とは、すでに結びつけて理解していたが、その足の絵が自分の足でもあり、母親や父親の足でもあることにM児は気がついたのである。これはM児にとって、まさに感動的な〈発見〉であったと言える。足の絵を見ながら自分の足にさわると、母親の足にさわると、自分の足にさわらせ、夜父親が帰ってくると、絵本を取り出してそのページを開き、自分の足にさわると、父親の足にさわるといふ行為の中に、感動の強さをうかがい知ることができる。

このことは、M児が覚えた「あんよ」という言葉が、豊かな内実を伴う言葉として獲得されたということでもある。言葉を覚えはじめたこの時期に、獲得した言葉が、絵本をとおしてさらにイメージ豊かなものになっていくことを、この事例は示している。

⑤〈事例10〉は、自力で絵本を読み始めた記録として注目したい。当時の記録の最後に、「1ページ1ページ自分でめぐりながら、そのページの絵を見て、ひとり声を出して楽しんでいる。すでに絵本を読んでいるといつてよいのではないか。」と記している。M児は、私に読んでもらった絵本をひとりで見ながら、絵本を〈読む〉こ

とに集中し、絵本と自分だけの世界にひたることができている。もちろんそれは、読み聞かせた私によって与えられた言葉とイメージの世界をなぞっているのである。与えられたイメージではあっても、自力でそのイメージを取り出して、絵本を楽しみはじめたのであった。

1歳2か月

事例11 <昭和53.8.29 (1歳2か月)>

朝10時ごろ。『およぐ』を見ながら、自分も腹ばいになり、足をけるようにして、泳ぐ真似をする。そして、何か言ってもらいたそうな顔つきで私を見る。「バッシャバッシュしてるの? じょうずね。泳いでるのね」と言うと、喜んでますます活発に足を動かす。

事例12 <昭和53.8.30 (1歳2か月)>

私が本を読んでいると、すぐに、自分の絵本を2冊かかえてきて、読んでもらいたがる。私のひざにまたがったのり、私の本をひっぱってどけて、自分の絵本を押しつけてくる。『およぐ』を読んでやっていると、よほどネコとイヌが泳いでいる絵が気に入っているらしく、私の手をひっぱってその絵の上にもっていき、何度もくりかえし読ませる。M児は「エヘッ エヘッ」とか「ウフンフフン」とかいった笑い方で、うれしそうにしている。

事例13 <昭和53.9.2 (1歳2か月)>

夜、泊まりに来ていたKさん(母親の友人で同年齢の女性)に、初めははずかしがっていたが、しだいになついで、自分から『およぐ』を持って来て読んでもらいたがり、Kさんの手をひっぱる。イヌとネコが泳いでいるページを出しては、「ワンワン泳いでるよ」「ニャンニャン泳いでるよ」と言ってもらいたがる。この他にも『くまちゃんのいちねん』『くまちゃんのいちにち』『くまちゃんのごあいさつ』『びよびよ』など、つぎつぎと出してはKさんに読んでもらいたがる。「くまちゃんシリーズ」のものでは、こまかな絵の中から、Kさんに尋ねられたもの(例えば、ブーブー<自動車>、おひさまなど)をさがして、ちゃんと指でさすので、Kさんが感心している。

事例14 <昭和53.9.3 (1歳2か月)>

お風呂上がりに、一人で『くまちゃんのいちねん』を見ていたM児が、「ポー ポー」と言う。のぞいてみると、秋祭りの様子をこまごまと描いた絵の一隅に、風船をたくさんつってあるのを見つけて、それを指さして、「ポーポー」と言う。「ボール」と言っているのだ。「ボールと言ってごらん」と言うが、「ポー」としか言えない。

事例15 <昭和53.9.4 (1歳2か月)>

7時20分に、M児起床。起きるとすぐに、『くまちゃんのいちねん』をとって来て、寝ているEの胸もとにすわりこみ、Eの手をひっぱって読ませようとしたり、絵本を押しつけたりする。Eが起きないので、自分でページをめくっていたが、七夕の絵が出ると、首をふって歌いだす。「ター ヤー トゥー」といった、長音化した音声に高低をつけたような歌で、表記するのはむずかしい。どうやら、最近、この絵のところで歌って聞かせている「さきのは さらさら のきばに ゆれる……」を歌っているつもりらしい。Eが相手になってくれないので、チラチラと私の方を見て、私の反応をうかがいながら歌っている。一緒に歌ってやると、さらに元気に歌いだす。

事例16 <昭和53.9.8 (1歳2か月)>

朝食後、台所のかたづけが終わると、待っていましたとでもいうように、『くまちゃんのいちねん』と『くまちゃんのごあいさつ』を持って来て、私の前にすわりこむ。本を私に押しつけるようにしてわたし。『くまちゃんのごあいさつ』の方を開いていくと、ボールがころがっている絵があり、自分からすぐに「ポー」と言い、私の顔を見る。「ボールとってくださいって、いつているのよ」と言う。さっさと自分で次のページをめくる。電話をしている絵のところでは、耳に手をやって、「アイ(ハイ)」という。「みーちゃん、かしこいね。カンカン(頭の意)」と言うと、自分の頭をなでている。

事例17 <昭和53.9.10 (1歳2か月)>

昨夜、父親が持って帰って読んでやった、『ともこのあさごはん』(ニタ・ソウター原作、ばんどうゆみこ文、岡部りか絵、年少版こどものとも、福音館、1978、タテ21cmヨコ20cm)が気に入って、昨夜は寝るまで離さないで持ち歩いてきた。絵本の中に出てくるクマやウサギなどの縫いぐるみの絵が気に入った様子。今朝起きるとすぐに、『ともこのあさごはん』を本棚からさがし出して、すわりこんで見ていた。場所を移動するときも持ち歩く。

事例18 <昭和53.9.11 (1歳2か月)>

このごろ、「抱いてあげるからおいで」と言う。私の前まで来て、くるっと向きをかえて私の膝にお尻からすわり、私と同じ方向をむいて本を読んでもらうのを好むようになった。今までは、向き合ってすわり、私の顔を見ながら読んでもらうことが多かった。自分の小さなイスに腰かける時も、これまでは、いったんすわるところに上がって、それから向きを変えてすわっていたが、このごろでは、お尻をつきだすようにして、およその見当をつけてちゃんと腰がかけられるようになった。今日も、『ともこのあさごはん』をもって自分のイスにすわり、いかにも物慣れた様子で絵本を見ている。

夜、ふとんを敷くと、ごろごろころがって遊んでいたが、『くまちゃんのいちねん』を持って来て、寝ころんで仰向けになって見ている。絵本は逆さまになっているが、わかるらしく、七夕の絵のところで「オーオー」と歌いだす。そのうち、手がだるくなったのか、今度はうつむけになって絵本を見ている。Eや私が寝ころんで本を読んでいる姿を真似をしているようだ。

事例19 <昭和53.9.13 (1歳2か月)>

夜7時45分ごろ。『ぴよぴよ』を持って私のところへ来る。一緒に見る。男の人がかなづちで釘を打っている絵のところで、「トントンしてるのよ。トントン」と読んで聞かせると、真似して「トントン」という。明瞭な発音ではなく、「チョンチョン」とも聞こえる。私が正しく「トントン」と言ってやると何度も真似している。小さな声である。「トントヨン」とでも表記したいような発音であった。

事例20 <昭和53.9.15 (1歳2か月)>

4時50分ごろ。台所仕事をしている私のそばで、すわりこんで『ママだいすき』(まどみちお文、真島節子絵、福音館、1972、タテ15cmヨコ15cm)を見ていたが、突然大声で「テァーテァーテァー」とさわぎだす。見ると、チョウチョウが描かれているページを開けていて、M児は、「ちょうちょう」の歌を歌いだしたのである。私も一緒に歌ってやると、私の口もとを見ながら、唇に力をいれてとがらせるようにしながら、左右に首をふって「テァーテァーテァー」と歌う。

M児がページをめくっていったカマキリの絵が出ると、じっと見ていたが、ジャンケンポンをする恰好を見せている。私が読んでやる時、この場面ではいつもジャンケンポンをしてきたが、今日は、自分から私に向かって両肘をかるくまげて、手をふって見せる。次にカンガルーが出てくるページでは、身体をゆっくり左右にふって見せる。これまで、M児は、このページにはあまり興味を示さなかったのが、飛ばして読んできたのだが、今日は、自分でカンガルーの絵を見ながら、私に身体をふって見せる。「ブルンブルン」というような声があるので見ると、ネコの親子のページを開いて、唇をブルブルいわせながら、顔をこすって洗う真似をしている。これはネコの絵を見るとよくする動作である。

M児は最近、絵本を見ながら、自分で読みとった(見てとったと言うべきか)内容を、声(言葉や歌)や動作で表現できるようになった。自分が何度も読んでもらってその内容をよく知っている絵本の場合には、読んでもらうのを待っているのではなく、自分の<読み>を声や動作を使って私に投げかけてくるようになった。

事例21 <昭和53.9.21 (1歳2か月)>

5時10分ごろ。『ともこのあさごはん』と一緒に見る。M児は、1ページ目の片隅に積木が描いてあるのに気づいて、指でさす。「積木よ、みーちゃんの積木もあるね」と言うと、すぐに立ち上がって、積木を持って来る。右手に積木を持って、積木の絵のところにもって行く。「おんなじねえ。これも、これも積木ねえ」と言うと、「フンフン」とうなずく。

事例22 <昭和53.9.21 (1歳2か月)>

夜7時20分ごろ。「みーちゃん、シュバシュバ(親がねっころがって、足の裏で子どものおなかを支えて宙に浮かせる遊び)してあげようか」と言って、M児を足に乗せて、高く上げる。「キャーッ、キャハハ」と大声で笑う。下に降ろすと『ぴよぴよ』を持って来る。私が「シュバシュバ」と言ったので、「シュバシュバ」と音を出して飛ぶヘリコプターが出てくるこの絵本を持って来たのである。自分でページをめくり、私が思ったとおりのヘリコプターの場面を出す。絵を指さして、「プシャプシャ」と言う。「シュバシュバ」と言っているつもりらしい。私が「ほんとだ。これもシュバシュバだね」と言うと、すぐに真似て「プシャプシャ」と、口もとにつばをためて、うれしそうに言う。ウシの絵が出ると「モー」、トラックが急停車する絵が出ると、「ジジー」「ジジー」と言う。「ギギー」と私が大声で言うと言ふ。

事例23 <昭和53.9.21 (1歳2か月)>

3時35分ごろ。おしめをたたんでいると、私の背中にもたれてくる。「肩をトントンして」と言うと、「トントン(タァンタァンとも聞こえる)」と言ってたたいていたが、そのうち『ぴよぴよ』を持って来る。すわりこんで、「トントントントン」とつぶやきながら、釘をたたいている男の人のページを出して、「アン」と言って私に知らせる。この場面を読むとき、いつも「トントンしてるのよ」と言っていたので、肩たたきの「トントン」から、この場面を思い出して、『ぴよぴよ』を取りに行ったのである。

1歳2か月における絵本享受の実態と考察

①<事例11><事例12><事例13>の『およぐ』は、月ぎめで購読していた「かがくのとも」(福音館刊)の8月配本で、M児に初めて読み聞かせた時からすぐに好きになった1冊である。この夏は7月に入って毎日のように、たらいで水浴びをさせた。「バッシュ、バッシュって泳いでごらん」と語りかけると、水の中で手足をばたつかせたり、腹這いになってバシャバシャして遊ぶのを喜んだ。

だから、M児は、この絵本に出会う前にすでに、「およぐ」という言葉を楽しみ体験をとおしてよく理解していたし、私が「バッシュ、バッシュしてごらん」と言うと、畳の上で腹這いになって足をバタバタさせて遊ぶようになっていた。この絵本を初めて読んだ時、表紙と裏表紙を広げた画面いっぱいに描かれた男の子が泳いでいる絵を見せて、「おにいちゃんがバッシュバッシュ泳いでるよ。みーちゃんもバッシュバッシュしてごらん」と言うと、すぐに自分も腹這いになって、泳ぐ真似をして大喜び。そしてイヌとネコが泳いでいる絵や、たくさん動物が泳いでいる絵がすっかり気に入ってしまった。生活の中での水浴びという楽しい体験がまずあって、『およぐ』という絵本に出会ったことで、M児の「およぐ」という言葉の理解は、自分の体験にさらに絵本の絵のイメージも加わって、いっそう確かで豊かになったと思われる。また、自分の体験とダブらせることで、絵本の絵を十分に理解し、ひとりで見ている時も、絵と同じような動作までして楽しんでいる。

以上のことから、生活の中で子どもがよく見知っているものや、体験したことのあることが、わかりやすい絵で描かれている絵本は、1歳前後の子どもでも、十分にその絵の内容を楽しむことができることがわかる。〈事例17〉〈事例18〉〈事例21〉の『ともこのあさごはん』の場合も、同じことが指摘できる。この絵本は、自分と同じような女の子が出てきて、自分が持っているような縫いぐるみをいっぱい持っていて、朝起きるとトイレに行ったり顔を洗ったり服を着替えたり……。ページをめくるとM児の知っている光景が描かれている。一度読んでやるとすっかり気に入って、その日は寝るまで手離さず、その後長く愛読した絵本である。

ちなみに、『およぐ』は、どうすれば泳げるよになるかを、わかりやすく図解した科学絵本で、その本当の内容を理解して、本のおりに息継ぎや浮き身の練習をやってみようとしたのは3歳の夏であった。

②この期になって、M児は、自分が説明してもらいたい絵や、私と一緒に見て楽しみたい絵や、もう一回読んでもらいたい絵などについて、〈事例12〉〈事例13〉に見られるように、読み手の手をひっぱってその絵の上に置くという行為で、自分の要求を示し始めた。興味の対象が明確になり焦点化しはじめてきた。そして、それを相手に伝える手段として、相手の手をひっぱって絵の上に置くという行為が現れてきた。なお、1歳3か月、4か月になると、〈事例24〉や〈事例34〉のように、相手の手をひっぱるといった行為ではなく、一歩進んで、自分で絵を指さして、説明を求めたり何か言って欲しがったりする

ようになってくる。

また、〈事例12〉や〈事例24〉(1歳3か月)で見られるように、絵本を読んでもらいたい時の要求行動も次第に激しくなり、くしつくく絵本を押しつける〈私が手に持っているものを取ってどける〉〈読んでもらうまで「ウンウン」と不服そうな声を出す〉といった行動が、しばしば見られるようになった。時としてひとりで見ている時もあるが、そんな時でも、〈事例11〉〈事例15〉〈事例20〉に見られるように、私を視野に置きながら、絵本を見ているM児に私が何らかの反応をすることを期待していることが多い。そして、その期待がかなえられた時の喜びは一段と大きいものであった。子どもに絵本を与える大人の側から言えば、子どもがひとりで見ている時も、その様子を見守ったり心にかけてたりしながら、適切に声かけをしたり、相手になって一緒に楽しんでやり、楽しさを共有するよう心がけることが大切である。

③M児は、絵本をとおして人と心を通い合わせる楽しさを知り、自分から積極的に人とかかわろうとする意欲も育っていった。〈事例13〉に見られるように、M児は、初めて会った人に対しても、自分から絵本を持って来て、それを一緒に楽しむことができている。まだ、言葉で自由にコミュニケーションできないが、絵本という共通に理解し楽しめるものを仲立ちにして、初めての人とでも心を通い合わせることができた。1歳4か月の〈事例40〉を見ても、お隣の奥さんが来ると、自分から『とこちゃんはどこ』を持って来て見せ、読んでもらいたがっている。この時期の子どもが人とかかわる意欲や行動をおこすうえで、絵本がおおいに役立つことに注目したい。

④絵本の絵を自分で読み取る動作や声出し(言葉や歌)が、前期よりもさらに盛んになり、絵本とのかかわりが自発性を増してきた。〈事例11〉〈事例15〉〈事例20〉に見られるように、自分で見たい絵本を取りだし、自分でページをめくり、絵を見ながら歌ったり、言葉で言ったり、絵と同じ動作をしたりして、自力で絵本を楽しむことも多くなった。私は、絵を見ながら歌って聞かせたり、M児にも発音しやすくわかりやすい言葉で語りかけたり、いろいろ動作をして見せたりして絵本を読んでやったのであるが、M児は、そのような私の読み聞かせをイメージしながら、それを真似て同じようにして絵本を見ている。そして、〈事例20〉のように、私が読んでやっている時も、おなじみの絵本の場合は、私よりも先に、歌が出たり、言葉が出たり、動作が出たりするようになった。

⑤〈事例21〉〈事例22〉〈事例23〉に見られるように、絵本の中の絵と実物を照合する、あるいは現実の行動や言葉を絵本の中の絵と照合するといった行動が観察される

ようになった。とくに、〈事例22〉〈事例23〉で、絵本とは関係のない場面で私がM児に語りかけた「シュバシュバ」とか「トントン」という言葉を聞いて、それと同じ発音で読み聞かせをしていた絵が出てくる絵本を持って来て、そのページを開いて見せたのは、M児がそれらの絵本の1ページ1ページをちゃんと記憶していて、現実体験することと絵本とをすぐに照合し、結びつけて理解することができたからである。このことは、言葉の習得が始まったこの時期の子どもに、絵本を読み聞かせることが、習得した言葉の内実やイメージを確実に豊かにしていくことを示している。

⑥ 〈事例18〉に見られるように、絵本を読む姿にも、安定感と自在性が見られるようになった。初めて絵本に触れたころの、たいたたり、かじったり、なめたり、やたらとページをめくったりするという行為は、まったくなくなり、今や絵本はM児にとって大切なもののひとつになっている。時には、気に入った絵本を抱きかかえるようにして持ち歩いたり、一日中手放さないでそばに置いたりしている。ひとりで見る時、畳の上に広げて読んだり、自分用の小さな椅子にすわって読んだり、ふとんを敷くとその上で寝ころがって読んだりする姿も見られるようになり、絵本を見ることも、いろいろな生活行動の中の一部ようになってきたようである。

また、私に絵本を読んでもらう時も、私に背をむけて、私と同じ方向で膝にすわり、私の声を聞きながら、自分は絵本の絵を見ながら読んでもらうのを好むようになったということは、自分で絵を読み取る力がついてきたからである。それまでは、向き合ったり、肩を並べるようにして、読み手の私の表情を見たり、動作をみたり、読んでいる口元に注視するといったことが多かった。読み手の表情や動作や声の出し方物の言い方を見て、それらに助けられながらイメージの世界を広げ、理解を深め、楽しんでいたのである。そして、その次の段階として、M児は、読み手の声に助けられながらも、自分で絵を見てイメージを広げ、理解し、楽しもうとはしはじめた。絵本を読んでもらうという他律的行為の中に、自分自身の力でも楽しみたいという、自律的行為の芽生えを見ることのできる時期といえる。

1歳3か月

事例24 〈昭和53.9.29 (1歳3か月)〉

午前中、自分の本箱からいろんな絵本をひっぱり出しては見ている。私がつわって新聞を読もうとすると、すぐに寄って来て、絵本を読んでもらいたがる。「ウンウン

と不服そうな声を出しながら、絵本を押しつけるので、私は何もできなくなってしまう。新聞をひろげると、M児はひっぱって取ってしまって、後ろへ投げてしまった。

私と一緒に絵本を見ていても、知っている絵が出てくると、私が読み聞かせるよりも先に自分から言葉を出すようになった。今日一緒に読んだ本で、M児の方から出た言葉をいくつか挙げると、次のようである。

『ママだいすき』の絵本

・チョウチョウの絵…「テァーテァーテァー」と、首を振りながら歌う。

・シマウマの絵…「パッ、パッ」と言いながら、私の膝の上でお尻を浮かせて飛び跳ねるようにする。

・サル of 絵…「キャ、キャ」と言う。明瞭な「キャ」ではない。「テァッ」のように聞こえる。

・ネコの絵…「ニャー」と言う。

『びよびよ』の絵本

・トラックが急停車する絵…「ジジー、ジジー」と言う。

・釘を打っている絵…「トントン」(タンタンとも聞こえる)と言う。

『くまちゃんのいちねん』の絵本

・山登りの絵…「アフー」と言う。私が「ヤッホー」と言って読んでやっているので、「ヤッホー」と言ったつもり。

・海の絵…両足を激しく動かして泳ぐ真似をする。私が「バッシャバッシャ」と言うと、ますます喜んで足を動かす。まだ「バッシャバッシャ」が言えない。

・クリスマスパーティーのおサルさんの絵…「キャ、キャ」

このごろは、ブルーナー絵本のような単純明快なタッチの絵よりも、『くまちゃんのいちねん』のようなこまごましている絵であっても、自分がよく見知っている物が、動的で現実感のある絵で描かれているのを好むようになってきた。私を与えたブルーナーの絵本は、さっさとめくってしまって、すぐに別の絵本を読んでもらいたがる。『くまちゃんのいちねん』などの「くまちゃんのことばのべんきょうシリーズ」は、1ページ1ページをじっくりと見ながら、私の手をひっぱって説明を求めたり、自分で絵を指さして何か言ってもらいたがったり、自分でも声を出して言ったりする。絵の中で自分が知っている物をさがしたりするのが面白いようである。

事例25 〈昭和53.10.4 (1歳3か月)〉

玄関の板の間の本棚は、私(母親)専用で、M児にはまだ見せてない絵本や児童文学が詰めてある。近所の子こどもたち(幼稚園児や小学生)が遊びに来ると、そこから本を出して読んで行くこともあり、M児もこのごろ

この本棚に興味をもちはじめ、よくこの本棚のところにやってくるようになった。そして、近所の子どもたちが見ていた本を覚えていて、その本を出したり、自分で取れない時は出してとせがむようになった。

今朝、洗濯機をかけていると、玄関の絵本の本棚から何かを出そうとして、なかなか出ないので、泣き声をあげて私に訴える。私がそばに行くと、「アンアンアン」と声をあげて出してとせがむようにする。かかとを上げ下げするようにして喜び、絵本を出してもらえらるものと期待している。M児が出そうとしていた『あいうえおのほん』(まつのりこ作・絵、福音館、1972、タテ15cmヨコ15cm)を出して持たせると、うれしそうに胸にかかえこむようにして、座敷へ行つてすわりこみページをめくり出す。洗濯機のプザーがなかったので、私がそばを離れると、いやがって、私の後を追ってくる。絵本を押しつけるようにしたり、私の手をひっぱって読んでもらいたがる。

『くまちゃんのいちねん』や『ママだいすき』など、すでに私と一緒に何度も何度も見て、自分でもその内容をよく知っている本は、ほっておいても、ひとりで見ている時が多いが、新しい絵本の場合は、必ず私に読んでもらいたがる。ひとりで見る時でも、私がそばにいて、その絵本の内容について話したり、説明したりすることを期待している。

この『あいうえおのほん』は、「あ」という字の下にアヒルの絵があり、さらにその下に「あ」の書き順が示してある。1ページ1ページが絵カードのようなった絵本である。「い」はイチゴ、「う」はウシ、「え」はエンピツ……。M児は、絵を見ながら私が読むのを聞いていたが、「く」(くもの絵)のところで、私が「みーちゃん、くもよ、くもさん」と言うと、「アッ」と言って、両手を胸に抱きこむようなかっこうをして喜ぶ。そのあとは、他のページをめくっても、すぐにクモの絵を出そうとして、自分でページを元にもどす。

事例26 <昭和53.10.5 (1歳3か月)>

夜8時過ぎ。私の絵本の本棚からいろんな絵本を引き出す。そのうち、『三びきのこぶた』(石井桃子訳、太田大八絵、福音館、1971、タテ21cmヨコ19cm)を私のところに持って来る。一緒にページをめくりながら、M児にわかりやすく話してやっていると、柱時計の絵が出る。「みーちゃん、これ時計よ。チクタク チクタク ポーンポーンよ」と言って、「チクタク チクタク ポーン ポーン おはよう おはよう 夜があけた……」と歌ってやると、身体をゆすって歌に合わせる。M児を抱いて、柱時計のところに行って、「みーちゃん、これ絵本の中の時

計とおんなじよ。チクタク チクタク チクタク チクタクって、いってるね」と言うと、柱時計をじっと見ている。M児を降ろして、また絵本の時計の絵を見せると、すぐに「アアッ」と言って、本物の時計を指さす。「おんなじよ。時計よ。チクタク チクタクっていってるね」と言うと、「チ、チ、チー」と真似て言う。

Eが帰って来たので、「みーちゃん、おとうちゃんに、時計を教えてあげてよ」と言うと、立ち上がり、本物の時計を指さす。

『三びきのこぶた』がすっかり気に入って、寝るまで手放さず、持って歩いたりすわりこんで見たりする。一緒に見てやると、時計のページを出そうとして、自分でさっさとページをめくってしまう。私が別のページを開こうとしても、時計のページを出そうとする。

事例27 <昭和53.10.9 (1歳3か月)>

『くまちゃんのいちねん』『ことばのべんきょう—くまちゃんのいちにち』(かこさとし文と絵、福音館、1970、タテ15cmヨコ15cm)を一緒に見る。私が「～は？」と聞いてやると、ちゃんとそれをさす。たとえば、赤ちゃん、おひなさま、たなばたさま、かめさん、こいのぼり、ムイムイ(虫の意)、おみこし、ブランコ、すべりだい、ありさん、でんわなど。とくに、今日は、『くまちゃんのいちにち』の中の、ブランコにのっている絵が気に入って、自分の身体を前後に揺すりながら、「プー—」と言う。私が次のページをめくると、すぐにそのページにもどし、「プー—」と言いながら、身体を揺すっている。「プー—」が「ブランコ」の「プー」なのか、公園のブランコに乗る時、私が「プーラン、プーラン」と言ってやるのを思い出して「プー」と言っているのかは決めがたい。(M児の動作などから考えると、ブランコに乗って、「プーラン、プーラン」と言ってゆすっていた時のことを思い出しているようであった。)

事例28 <昭和53.10.10 (1歳3か月)>

『くまちゃんのいちねん』を出して来て、自分でページをめくっている。私がそばから「おひなさまは?」「赤ちゃんは?」「こいのぼりは?」「チュンチュンは?」などと聞くと、指で正確にさして私に教える。

そのうちに、空に三日月が出ているのを見つけて、指さして「マンマン」と言う。月を見ると「のんのんさん(月の意)よ」言って聞かせている。「のんのん」と言えなくて、「マンマン」と言う。「みーちゃん、お月さまがわかったの、かしこいね。そう、あれはお月さまよ。のんのんさまよ」と言うと、今度は、今まで見ていた『くまちゃんのいちねん』をめくり、何かをさがしている。私が、たぶんここだろうと思って、お月見のページを出

してやると、すぐに月の絵をさして「マンマン」と言い、さっとふりむいて、今度は空の月を指さして、また「マンマン」と言う。自分から、空の月と絵本の月が同一であることを指摘した。「そう、よくわかったねえ。おんなじよ。のんのんさまよねー」と、私も絵と実物の月を交互に指さしながら言うと、「フン」と返事する。

事例29 <昭和53.10.20 (1歳3か月)>

朝7時30分ごろ起きる。起きるとすぐに『ひとりぼっちのライオン』(長野博一作・絵、福音館、1973、タテ21cmヨコ19cm)を開いて見ている。「アアッ」とか「ウン?」とか言っていて、そばにいるEや私に問いかけたり、語りかけたりする。ハリネズミやヒツジが逃げ出す絵のところでは、必ず手をふってバイバイをする(まだ「バイバイ」が言えないので声は出さない)。先日、「さようなら、バイバイ」と言っていて読んで聞かせたので、ちゃんと覚えていて、バイバイしているのである。

事例30 <昭和53.10.22 (1歳3か月)>

朝10時すぎ。『ひとりぼっちのライオン』を開いて見ている、ハリネズミが後足だけ見せて逃げて行く絵を見て、手をふる。私が「バイバイしてるの、えらいね」と言うと、「バ、バ」と言う。「バイバイ」とは言えないが、初めて「バイバイ」が音声化された。

事例31 <昭和53.10.22 (1歳3か月)>

朝10時過ぎ。『ひとりぼっちのライオン』を見ている、シカが出てくると、私に、「アアッ」と言っていて指さして見せる。「シカちゃんよ」と言うと、立ち上がって、シカの絵のついたタオルケットを取りに行き、ひろげようとする。「そこにもシカちゃんがいるね。ひろげてみるの?」と聞くと、「ウン」と言う。タオルケットをひろげると、今度はステレオのところへ行って、「ウンウン」と言いながら「子鹿のバンビ」のレコードをかけてもらいたがる。昨日は、「子鹿のバンビ」のレコードをかけていると、タオルケットを持って来て、私にシカの絵を見せた。今日は、その反対で、まず、絵本のシカの絵からタオルケットのシカの絵を思い出し、タオルケットのシカの絵から「子鹿のバンビ」の歌を思い出し、レコードをかけてもらいたがる。「子鹿のバンビ」のレコードをかけると、踊りだす。踊りながら、ときどき、タオルケットのシカの絵を見に行く。

1歳3か月における絵本享受の実態と考察

① <事例24>に見られるように、私と一緒に絵本を見ている時も、よく知っている絵本の場合は、私が読み聞かせるよりも先に、歌や言葉や動作が出てきて、自発的

に絵本を楽しむ力が伸びてきた。1歳2か月の<事例20>ですでに観察されてはいるが、この期に入ってさらに盛んになっている。

② <事例25> <事例26>に見られるように、M児の絵本に対する興味関心は強くなり、私から与えられた自分の絵本だけでは満足できず、私専用の絵本や児童文学の入った本棚から次々と絵本を取り出し、読んでもらいたがるようになった。悪さをされないようにと、びっちり詰めておくと、出して欲しいと泣いたりする。我が家に入出入りしていた子どもたち(M児より2歳から5歳年上の女の子3、4人。私が絵本を読み聞かせたり、自分たちで好きな絵本を読んだり、M児と一緒に遊んでくれたりした)の読んでいる絵本にも興味を示し、その絵本を覚えていて、私の本棚から取り出して読んでもらいたがる。

<事例25>の『あいうえおのほん』もそういう本の一冊。初めてそれを手にした時、いかにもうれしくてたまらないといった恰好で抱きかかえた姿には、この本の中にどんなことがかかっているのか、どんな楽しみが詰まっているのかという、初めて手にする本への期待感があふれていた。この事例は、絵本というものが、M児にとってどういう存在になってきたかということをよく物語っている。

③ また、初めての絵本は、<事例25>でもすでに気づきとして記録しているが、必ず私に読んでもらいたがり、その要求行動は、かなりはげしいものであった。それだけに、読んでもらうとなると、たいへん喜び、かなり集中して聞くことができた。この時期は、新しい本を自分で読んでみようという行動はまだ見られない。新しい本は、まず、何度も説明してもらったり、話してもらったりして、読み手と一緒にその内容を楽しみたいようである。楽しみを共にわかちあう読みをまず体験して、その共同体験としての読みの中から、自分ひとりでも楽しめる読みが生じてくるのである。そのことは、この時期、M児がひとりで楽しんだ絵本のほとんどが、私との共同体験の深かった絵本であったことから明らかである。

④ <事例27>は、1歳2か月の<事例22> <事例23>と合わせて考察すると興味深い。M児は、くくまちゃん)がブランコに乗っている絵に触発されて、自分がブランコに乗った体験を思い出したのである。おそらくその体験をイメージに浮かべながら、「ブー、ブー」と言いながら身体を揺すっていたに違いない。だから、繰り返して繰り返してそのページの絵を出そうとしたのである。すでに、1歳2か月の<事例22> <事例23>で、実際に体験したこと(動作や言葉など)からすぐに絵本の絵を思い出すと、いう行動が見られた。その逆、つまり、絵を見て自分が

体験したこと(動作や言葉など)思い出したのがこの「ブー」である。つまり、体験したものと絵本の絵とを、互いにどちらからでも即座にイメージ化して結びつけることが可能になってきたのである。このイメージ化の相互性と迅速性の発達、M児の絵本とのかかわりを、いっそう強く楽しく自発的なものにしていったことがわかる。

⑤<事例25>(クモの絵)、<事例26>(時計の絵)、<事例27>(月の絵)では、絵と言葉と事物とをはっきりと照合できた時の、M児の喜んだり驚いたりする様子が記録されている。たとえば、<事例25>でクモの絵を見て、「アッ」と声をあげ、両手をパッと抱きかかえるようにして、驚き、そして喜んだ。そのころM児は、自分がいつも外を眺める窓の片隅に巣を張っている小さなクモに興味をもって、私も「今日もクモさんがいたね」などと語りかけたりしていた。ちょうどそんな時に、しかも初めて読んでもらう絵本の中に、思いがけずクモの絵が出てきたのである。そばで見えていても、それは、絵と言葉と事物との照合が感動をともなってなされた瞬間であった。<事例26>の柱時計も、<事例27>の月も、M児はすでにそのどちらとも、言葉と事物とを正しく照合して理解していたが、それらを絵本の中に見つけた時、M児はやはり強い印象を受け、興奮ぎみであった。とくに<事例26>では、M児は、「チクタク(時計の意)」という私の言葉をすぐに真似して「チ、チ、チー」と言ったり、絵本を繰り返し見たり、絵本の時計の絵を指さしたり、父親に時計(本物)を教えたりと、「時計」と感動的に出会えた一日であった。

私は、一語一語言葉を習得していくこの時期の子どもが、絵本によって、感動を伴う言葉との出会いをしていく現場に立ち会い、絵本の読み聞かせが0歳児、1歳児にも必要であることを確信したのであった。

⑥<事例28><事例30>に見られるように、自分で絵本を見ている時、「アアッ」とか「ウン?」とかいった声を出して、まわりの者(父親や母親や近所の子どもたち)に問いかけたり、語りかけたりするようになった。たいていは指さしがともなった。自分が見たものを相手に知らせたい、一緒に見てほしい、これは何? 教えて、といった気持ちや要求が込められた声出しである。それ以前は、手を引っぱって強引に読ませようとしたが、ここに来て、必要に応じて声を出して相手の注意をひき、自分の要求が満たされると、再び自分で絵本を見はじめた。これもまた、絵本享受の発達の一つの段階として受けとめておきたい。

⑦<事例30>は、すでに上記の⑤で指摘した内容と同

じ事例であるが、絵と言葉と事物の照合に、さらに歌や踊りとの照応も加わって、言葉のイメージ化が拡大している。M児は、『ひとりぼっちのライオン』のシカの絵を見て、私に「シカ」と説明させ、次にシカ(子鹿のバンビ)が描かれている自分のタオルケットを持ち出し、次に「子鹿のバンビ」のレコードをかけさせ、レコードの歌に合わせた踊りだし、踊りながらタオルケットのシカの絵を見るところを、実に楽しそうにやったのである。一冊の絵本からイメージがどのように広がり、行動化されていくか、この期の子どもの豊かなイメージ形成力をみることができる。

1歳4か月

事例32 <昭和53.10.29 (1歳4か月)>

座椅子にすわって、『おにたろうとあおたろう』(坂坂寿一作・絵、福音館、1970、タテ15cmヨコ19cm)を見ていたが、毛虫の絵が出ると、指先をくねくね動かしながら、Eの足にさわりに行った。Eがおおげさに「キャー、たすけてー」と言って足をひっこめると、「キャッキャッ」と大声で笑い、何度もEをからかいに行く。虫を見つけたり、絵本で虫の絵を見た時、「ムイムイ(虫の意)、ムイムイ」と言いながらM児をくすぐってやっていたのだが、このころは、自分から私たちにしかけてくるようになった。

事例33 <昭和53.10.30 (1歳4か月)>

夜8時40分ごろ。私の本棚のところに行き行って絵本を出してもらいたがるので、『三びきのくま』(瀬田貞二訳、丸木俊絵、福音館、1971、タテ21cmヨコ19cm)を出してやり、一緒にふとんの中に入って見る。1ページ1ページ絵の説明をしながら話しかけると、うなずいたり、指さしたりしておとなしく見ている。クマのスリッパの絵を見て、足をふとんから出して手でつかみ、私に見せる。「そうよ、スリッパよ。あんよにはくのね。よく知ってるね」と言うとうれしそうにうなずく。

事例34 <昭和53.11.1 (1歳4か月)>

夕方5時過ぎ。童謡のレコードをかけてやると、踊る。「おつかいありさん」という曲になると、自分の本箱のところへ行ってゴソゴソしていたが、『くまちゃんのいちねん』の夕立ちのページを開いて、私のところへ持って来て、ア리가はっぱの傘をさしている絵を指さして見せる。こまごまといろいろなものが描かれている中の、小さな小さなアリの絵である。この記憶力はどうか。「えらいね」とすっかり感心してしまう。M児が絵本をさがしている間に終わってしまった「おつかいありさん」の曲をもう一度かけてやると、絵本を持ったまま、足を

M「テアッテアッ」と真似る。

(このあたりからEの話がおもしろくなってきたらしくて、いたずらをやめて目をかがやかせてEの顔を見ている。)

E「さあ、またププーに乗るよ。ププー、ププー」

M「プー、プー」と言いながら、ハンドルを動かす動作も真似る。

E「つぎは何かな？」とMの顔をのぞきこむようにして笑いながら言う。

M「フンフン」と鼻をならすような笑い方をする。うれしくてたまらないときには、こんな笑い方をする。

E「コッコちゃんだあ！ コッコ、コッコ」

M「コッコ、コッコ」と言う。

E「ププーはもう帰ります。みんなさようならあ。」と言ってEが手をふって見せる。

M(自分もすぐに手をふる)

こんな簡単なストーリーだが、Eが身ぶり手ぶりを交えながら、Mをのぞきこむようにして話してやると、自分もEの身ぶりや言葉を真似て、Eの即興の作り話を、とても喜んだ。

事例40 <昭和53.11.7 (1歳4か月)>

2時ごろ。Iさん(お隣の奥さん)来宅。M児は自分からすぐに『とこちゃんはどこ』を持って来て、Iさんの前にすわって、動物園のページを開いて見せる。Iさんが「みーちゃん、これ、なに？」と聞くと、「ウォー」と答えたり、「みーちゃん、ゾウさんどこ？」と聞くと、正しく指さす。「よく知ってるわね」とほめられると、今度は『いぬとにわとり』(石井桃子作、堀内誠一絵、年少版こどものとも、福音館、1978、タテ21cmヨコ20cm)を持って来てIさんに見せ、「コッコ、コッコ」と、うるさいほど連発する。

事例41 <昭和53.11.8 (1歳4か月)>

『いぬとにわとり』や『にわとりさん』をよく見ている。ニワトリの絵が出てくると「コッコ」、イヌの絵が出てくると「ワンワン」と自分で言う。

私が『にわとりさん』の中のお風呂の絵を指さして、「これなあに？」と聞くと、「プチャブチャ」(お風呂の意。ポチャポチャと言えずにプチャブチャとなる)と言う。今度は自分でコップの絵を指さして、「アアッ！」と言って私の顔を見る。「コップよ」と言うと、すぐに真似て「パップ」と言う。弱々しい言い方。もう一度私が「コップ」と、ゆっくり言って聞かせると、口をパクッとさせただけで、声は出さなかった。

事例42 <昭和53.11.10 (1歳4か月)>

夕食後、『にわとりさん』を持って来て、Eに読ませようとする。絵を見ながらEが「ワンワンワン」と言うと、M児もありったけの大声で「ワンワンワン」と言う。おなかの底から声を出している。「コッコー」とか「ニャーン」も大声で言う。ヒヨコの絵が出てきたので、「ピヨピヨ」と言ってやると、「ピィピィ」と口先で、小さな声で言う。自分がまだはっきり言えないものは声が小さくなる。そのうち、Eから『にわとりさん』を取り上げ、自分でページをめくりながら見ていたが、急に本に口をつけてパクパクと何か食べている様子をする。見ると、冷蔵庫のドアがあいていて、中にいろんな食べ物が入っている絵のところであった。私がおもしろがると、調子にのって何回も絵本にチュッと口をつけたり、食べる真似をする。「みーちゃんの冷蔵庫は？」と聞くと、台所の冷蔵庫を指さす。

事例43 <昭和53.11.11 (1歳4か月)>

3時過ぎ。童謡のレコードをかけると喜ぶ。「おつかいありさん」の曲がかかると、本箱の前に行き、その中から『ありくんこんにちは』(板坂寿一作、的場伸幸・よこいだいすけ絵、福音館、1970、タテ15cmヨコ15cm)と『くまちゃんのいちねん』を持って、私のところへ来る。『くまちゃんのいちねん』の夕立のページを開こうとするが、なかなか出ないので、私とそのページを開いてやると、葉っぱを傘がわりにしたアリを指さす。「ほんとは。アリさんいたね」と言うと、今度は、『ありくんこんにちは』の方を私にさし出す。「これにもアリさんいるね」と言うと、うれしそう。まだ「アリ」と言えない。

事例44 <昭和53.11.14 (1歳4か月)>

7時30分ごろ起床。Eと私とM児と、しばらくふとんの中で遊ぶ。そのうち、ふとんの中におおむけになって、Eの手を枕にして、『にわとりさん』を自分で持って見る。Eが寝転んで本を読む時の恰好を真似しているように見える。一人前の恰好に思わず苦笑。ドアのあいている冷蔵庫の絵が出てきたので、私が、「みーちゃん、これ、牛乳よ」と指さして語りかけると、さっと起き上がって、冷蔵庫の前に行き、「ウンウン」と、何かを訴えるような、切なそうな声を出す。「みーちゃんも牛乳いるの？」と聞くと、深くうなずく。私が冷蔵庫を開けて、牛乳の箱を出すと、ケラケラといった感じで、うれしそうに声をたてて笑う。

事例45 <昭和53.11.16 (1歳4か月)>

大阪教育大学の児童文化ゼミ(Eのゼミ)の学生たちが催した、紙芝居フェスティバルに連れて行く。

紙芝居が始まると、おとなしく私のひざにすわって、前を見ている。時々、紙芝居を指さして、「アン！」とか

「オイ！」とかいった声をたてる。何かを食べている絵が出てくると「マンマ」とつぶやいたり、犬の絵を見て「ワンワン」と言ったり、自分の知っている絵が出てくると強く反応する。

帰りに、大阪城の近くの道を歩きながら、「チャーチャー」と言って空を指さす。見ると、カラスが2羽飛んで行く。「カーカー」が「チャーチャー」となったのだろう。『あかずきん』(大塚勇三訳、堀内誠一絵、福音館、1970、タテ21cmヨコ19cm)の中のカラスの絵を見て、私が「カーカーよ」と言って聞かせ、M児は「チャーチャー」と真似していたのだが、本物のカラスを見てすぐに「チャーチャー」と言って私たちに教えたので感心する。

事例46 <昭和53.11.20 (1歳4か月)>

朝8時過ぎ、『あかずきん』の絵本を持って来て読んでもらいたがる。表紙の〈あかずきん〉の絵をさして、「これ、みーちゃんよ。みーちゃん」と言うと、「ミイミイ」と言う。ページをめくりながら、〈あかずきん〉の絵が出る度に「これは、だれ？」と聞くと、全部「ミイミイ」と答える。まだ「ミーチャン」とは言えない。「ミイミイはどこにいるの？」と聞くと、自分の鼻をおさえる。『あかずきん』の最後の場面のおばあさんの絵を指さして、「バーバ」と言う。『いぬとにわとり』の中のおばあさんの絵も、自分から「バーバ」と言う。時に「バーバ」という言い方にもなる。最近では、おばあさんの絵でなくても、大人の女の人や男の人の絵に対しても「バーバ」と言いだした。父親や母親以外の大人に対して、この言葉を使っている。また、絵の中だけでなく、今日、お隣のIさんと一緒に買い物に行った帰り、Iさんに向かって「バーバ、バーバ」と言う。

事例47 <昭和53.11.21 (1歳4か月)>

『とこちゃんはどこ』を車の中で何度も見る。市場で迷子になった〈とこちゃん〉の絵はもうすっかり覚えていて、「とこちゃんは？」と聞くと、さっと〈とこちゃん〉のいる場所を指で押さえ、「ウマウマ」と言う。鯛焼き屋の前に立っている〈とこちゃん〉が、次のページで鯛焼きを買ってもらうのを知っていて、こう言う。

1歳4か月における絵本享受の実態と考察

① <事例32>は、絵本に触発された「ごっこ遊び」の発生が見られる事例として興味深い。子どもは、3、4歳にもなると、絵本の世界をそのまま遊びの中に取り入れて、絵本の内容をなぞった「ごっこ遊び」を、仲間と一緒に楽しむようになる。M児も、3、4歳のころ、『三びきのやぎのがらがらどん』(マーシャ・ブラウン作・

絵、瀬田貞二訳、福音館、1965)や『さんまのおふだ』(水沢謙一再話、梶山俊夫画、福音館、こどものとも、1978)など、大好きな絵本のお話を、絵本を離れて、「ごっこ遊び」として、私相手にたびたび楽しんだものである。このような、「絵本」から「ごっこ遊び」への芽生えのような行動が、<事例32>には見られる。

『おにたろうとおおたろう』は、0歳期から読み聞かせた絵本で、毛虫の出ってくる場面で、私は「ムイムイ、ムイムイ」と言いながらM児をくすぐり、M児もそれを喜んだ。それは私の方からしかけた「遊び」といってもよいであろう。いつしかM児もこの絵本を私と一緒に見る時は、指先をモゾモゾ動かして見せたりするようになった。すでにそのような行為の中に「絵本」から「ごっこ遊び」への兆しがあるといえるかもしれない。ただ、<事例32>の場合、M児は、誰の示唆も助けも借りないで、絵本を見ていて突然自分から父親に「遊び」をしかけていったのである。しかも、M児はいちどそれを始めると、読んでいた絵本はそっこのけで、まさに「ムイムイごっこ」とでも命名したいようなその遊びに夢中になっている。まだ、ストーリーの展開をイメージで追いつながらの本格的な「ごっこ遊び」ではない。しかし、絵本から触発されて毛虫の絵をイメージしながらの自発的な行為であるところに、「ごっこ遊び」の芽生えを見ることが出来る。

② <事例33> <事例35> <事例37> <事例42> <事例45> <事例46>などに見られるように、自分で絵の意味や内容を理解し、その理解したことを言葉や動作で表現することが自在性を増し、しばしば観察されるようになった。とくに<事例33>では、初めて読んでもらう『三びきのくま』にすっかり心を引きつけられていたが、クマたちのスリッパの絵を見て、私がまだ何も言わないのに、足を見せてスリッパのことを私に知らせようとした。この時私は、この絵本の次のような文章を読んで聞かせていた。

「三びきは、めいめいおかゆのどんぶりをもっていました。かわいいちっちゃいくまは、ちっちゃいどんぶり、ちゅうくらのくまは、ちゅうくらのどんぶり、すぐおっきいくまは、おっきいどんぶりでした。

(4、5ページ)

くまたちは、また、めいめいに、こしかけるいすをもっていました。かわいいちっちゃいくまは、ちっちゃいいす、ちゅうくらのくまは、ちゅうくらのいす、すぐおっきいくまはおっきいいすでした。」

(6、7ページ)

私は、この文章を読みながら、「ちっちゃいくま」と

〈ちっちゃいどんぶり〉の絵をさして教えるというふう
に、文章の内容と絵とを照合させてM児に読み聞かせて
いた。〈どんぶり〉の出てくるページにも、〈いす〉の
出てくるページにも、クマたちのスリッパの絵が描かれて
いるが、文章の中では触れられていない。M児は、私が
読むのを聞きながらも、絵をよく見ていて、私がスリッ
パのことに触れないので、「スリッパもあるよ」と言いた
くて、足を手でつかんで私に見せたのである。まだ、自
分で「スリッパ」と言えないM児の、自分が読み取った
ことを相手に伝えようとする、身体を使っての精一杯の
表現であった。

〈事例35〉では、やはり初めて手にした『にわとりさ
ん』を一緒に見ている時、もうすっかりおなじみのイヌ
やネコが出てくると喜んで、すぐに自分から「ワン！」
とか「ニャーン！」とか声を出して言う。そして、冷蔵
庫のドアが開いていて、その中に魚・ハム・果物・野
菜・牛乳・たまごなどが入っている絵が出てくると、大
声で「マンマ！」と言った。これには少し驚いた。イヌ
やネコの絵は、それまでにいろいろな絵本で見えてき
るので、パターンの認識力がついていて、初めて見る
絵でも認識できるであろうが、冷蔵庫の絵は、絵とし
ては初めて見る絵なのである。それを、ページを開いた
とたん何かが描かれているか理解して「マンマ！」と言
ったのである。M児は、日常生活の中ですでに冷蔵庫の
ことはよく知っていた。野菜・果物・牛乳・たまごなど
も実際に見ていて知っている。つまり、日常的な生活
体験をもとに、この絵の読み取りができたのである。

さらに、〈事例42〉では、同じ絵を見ている時、本に
口をつけて、冷蔵庫の中のもの食べる真似をくりかえ
して楽しんでいた。「みーちゃんの冷蔵庫は？」と私に
聞かれて、台所の冷蔵庫をさし示したことからも、M児
は、この絵の内容を生活体験をとおして正しく理解して
いることがわかる。

また、〈事例37〉では、初めて見る『とこちゃんはどこ』
の動物園の絵がのっているページを開いたとたん、ライ
オンの絵を見て「ウォーッ！」と大声をあげた。これは、
それまでの絵本体験をとおして、すでにライオンを知
っており、初めて見るライオンの絵でもそれがライオン
であることをただちに認識でき、それが「ウォーッ」と
いう言葉になって出てきたのである。

このように、M児は、生活体験の広がりや絵本体験の
積み重ねをとおして、絵本の絵の意味や内容を自分の
力ですばやく、確実に読み取り、それを言葉や身振りで
表すことができるようになった。ちなみに、このような
事例で、当時私が「こんなことまで読み取れるようになっ

たのか」と感心したのは、1歳5か月の〈事例58〉であ
る。

③M児の絵本体験の積み重ねが、この期においてどん
な形で現れたかは、②で述べたことのほかに、いくつ
か指摘できる。

一点めは、自分の好きな絵や興味をもった絵は、どの
絵本のどのページにのっているか、ちゃんと記憶して
いることである。そして、何かをしている時、そのこと
に触発されて、記憶している絵がイメージされるらしく、
すぐに絵本を出してつきあわせて楽しむ姿がときどき見
られた。たとえば、〈事例34〉〈事例43〉に見られるよ
うに、レコードで「おつかいありさん」を聞くと、すぐ
に絵本の中に描かれているアリの絵がイメージとして浮
かんでくるらしく、しばらく見ていなかった絵本なのに、
それを取り出して、アリの出てくるページを出して見
ている。このように、絵本体験の積み重ねが、記憶を確
かなものにし、イメージの広がりを豊かにし、さらには、
生活の中で体験することを絵本とつきあわせてみるとい
う新しい楽しみ方を生み出している。

二点めは、〈事例39〉に見られるように、絵本がなくて
も、「おはなし」だけを聞いて、自分でイメージを広げな
がら、その「おはなし」を楽しむことができたことであ
る。もちろん、ごく単純なストーリーで、自動車に乗
っていると、M児が絵本の中でよく知っている動物が次
々に出てくるというだけではあるが、いたずらをやめて
次第に「おはなし」に夢中になっていくことができた。
これはやはり、実際に絵を見なくても、それまでの絵本
体験に助けられながら、言葉をイメージ化して楽しむこ
とができたからである。

三点めは、〈事例45〉に見られるように、大学生の主
催した「紙芝居フェスティバル」に参加して、M児なりに
紙芝居を楽しむことができたことである。この催し物は
幼児から小学生を対象にしたもので、広い会場には、知
らない子どもたちや大人がたくさん来ていて、ざわつ
いてた。M児は初め驚いたり不安がったりしていた。
しかし紙芝居が始まると、次々に変わる絵にいろいろ反
応を示し、最後まで、興味をもって見ることができた。
1歳4か月のM児が、このような催し物を、最後まで自
分なりに楽しむことができたのは、これまでの絵本
体験の積み重ねをとおして、絵を読み取り、イメージを
広げる力が育っていたからである。

④1歳3か月でも指摘をしたが、この時期に入っ
てますます言葉を習得する意欲が盛んになり、絵本を
読んでもらっている時、聞いた言葉をすぐに反復して覚
えようとした。〈事例35〉の「コッコ」「ピヨピヨ」、
〈事例41〉の

「コップ」など、それまで言えなかった言葉を、私が読むのを聞いて即座に反復している。「コッコ」はうまく言えてうれしかったらしく、それからは、しばしば「コッコ」という言葉が出るようになった。しかし、「ピヨピヨ」は「パプゥ」とか「プオプ」、「コップ」は「パップ」と、正しく真似できなかつた。自分でもそれがわかっていて、もう一度真似させようとするすると黙ったり、声を出さず口だけ動かしたりした。また、〈事例42〉のように、自分がまだはっきり言えない言葉は小さな声で言ったりする。これは、自分の発音が正しいか正しくないか聞き分けられるようになってきているからであり、同時に、自意識も強くなって、正しく言えない場合は、自分でもおもしろくないらしく、声が小さくなり、反復をいやがるなどの反応も見られた。反対に、〈事例42〉のように、うまく言える言葉は自信たっぷり大声を出している。言葉の習得に自己評価が始まった事例である。

⑤また、この時期、子どもは、新しく覚えた言葉を、あれに使えないかこれにも使えないかといった感じで、いろいろに使ってみることがある。いわゆる「名詞の一般化」という現象である。〈事例46〉に見られるように、M児の絵本の絵に対する読み取りにも、この現象が観察された。もともと「バーバ」という言葉は、M児の祖母のことをこう言って教えたのであるが、M児は、母親以外の大人の女の人に対して「バーバ」と言い始め、絵本の絵を見てもそう言い始めた。「名詞の一般化」というのは、普通、試行錯誤しながら言葉を習得していく現象としてとらえられているが、M児の事例を見ていると、それは、母親かそうでないかという一点にこだわっての「バーバ」であった。「名詞の一般化」という現象は、単に試行錯誤というよりも、その言葉に対して子どもなりに独自の解釈があり、こだわりがあるのではないかと私には思えたのである。

⑥〈事例47〉を見ると、M児が、絵本のストーリー性に気づき始めたことがわかる。『とこちゃんはどこ』は、11月5日から読み始めて、すぐに大好きになった絵本で、11月7日には、来宅したIさんに自分から出して見せたりしている(〈事例40〉)。この絵本は、主人公の〈とこちゃん〉が、市場・動物園・海水浴場・お祭り・デパートなどで、すぐに人込みにまぎれこんでどこにいるかわからなくなってしまうという、〈とこちゃんさがし〉に夢中になれる、子どもたちが大好きな絵本である。M児も私に教えられながら、〈とこちゃんさがし〉に興味をもつようになり、〈事例37〉〈事例38〉〈事例47〉、1歳5か月の〈事例49〉と見ていくと、読みはじめてから二十日余りたった11月27日には、どの場面の〈とこちゃん〉も、自

分でさして示せるようになっていく。この絵本をM児に読み聞かせる時、私は、〈とこちゃん〉の行動を1ページ1ページ追っていきながら、〈とこちゃん〉がどこにいて、何をしているか、説明してやった。そのうちM児は、次はこうなるという展開までも理解しはじめたらしく、たとえば市場の場面では、鯛焼き屋の前に立っている〈とこちゃん〉を指さして「ウマウマ」と言い、次のページを開いて鯛焼きを買ってもらっている〈とこちゃん〉をながめるのである。

M児は、『とこちゃんはどこ』との出会いによって、ストーリーの展開性に気づき、主人公の行動を追いつながりながら、ページを開けば次はこうなるということがわかりはじめた。『とこちゃんはどこ』という絵本は、絵本の中の一つ一つの絵に興味を示してきたM児に、ストーリーの展開を追うおもしろさを教えてくれた、大事な絵本であった。この期はM児にとって、絵本のストーリーを予想する力がつきはじめた時期といえる。

1歳5か月

事例48 〈昭和53.11.26 (1歳5か月)〉

1時過ぎ。『いぬとにわとり』(石井桃子作、堀内誠一絵、福音館、1978、タテ21cmヨコ20cm)をひとりで見ながら、自分でイヌを指さして「ワンワン」、ニワトリを指さして「コッコ」、オバアサンを指さして「バーバ」と言っている。そして真面目な顔をして、1ページ1ページ開いては、じっと絵を見て、時に「ワンワン」と言ったり「コッコ」と言ったりしながら、ひとりで見ている。私が、「みーちゃん、ご本読んでるの? えらいね」と言うと、立ちあがって「コッコ、コッコ」と言いながらその絵本を持って来る。

事例49 〈昭和53.11.27 (1歳5か月)〉

夜8時ごろ。あまりレコードばかりかけてもらいたがるので、「みいちゃん、〈とこちゃん〉のご本持っておいで。一緒に読もう」と言うと、本棚の所へ行って、自分で『とこちゃんはどこ』をさがして持って来る。ほとんど絵本の文章どおりに読んで聞かせると、絵を見ながらじっと聞いている。そして、それぞれの場面で人込みの中にまぎれこんだ〈とこちゃん〉について「〈とこちゃん〉はどこにいるのかな」と尋ねると、今日は全部指さして教えることができる。今までは第一場面の市場の中の〈とこちゃん〉だけを指さしていて、あとは、私が「〈とこちゃん〉はここにいた」と言って指さしてやっていたのだが、今日は、自分で全部指さすことができたのでびっくりしてしまう。〈とこちゃん〉のお父さんの絵を見て、「チ

チャーチャン、チャーチャン」と、父親の部屋のほうを指さしてしきりに言う。

事例50 <昭和53.12.1 (1歳5か月)>

『くまちゃんのいちにち』を持って来て、Eの前で開き、自分で絵を指さして、説明させようとする。Eが「プーちゃん」とか「ワンワン」とか答えると、いかにも「そうさそうさ」というふううなずいて、また次の絵を指さす。自分が私たちに今までされてきたことを、今度は自分がするようになった。

事例51 <昭和53.12.8 (1歳5か月)>

4時ごろ、『あいうえお』を開いて見ている。私に表紙を見せて、「ア、ア、ア、ア」と大声で言う。先日、「あ」の字を指で押さえて、「あ」と言って教えたのを覚えているのだ。この本は、1ページに五十音順にひらがなで一字ずつ書かれ、字の下にその字で始まる物の絵が描かれている。「あ」は「あひる」の絵。今までは、絵を見てその名前を言ってもらうのを喜び、自分でもウシの絵を見て「モー」、エンピツの絵を見て「ジージ」などと言っていたのだが、今日は、絵ではなく、ひらがなの字の方を指さして読んでもらいたがる。そして、私が言ったあとを真似て発音する。「あ」を「ア」、「い」を「イ」、「う」を「ユ」、「え」を「イエッ」など、はっきり言えるのもあれば、正しく発音できないものもある。絵だけに向けられていた興味が、字にも向けられ始めたようである。

事例52 <昭和53.12.12 (1歳5か月)>

朝8時ごろ。昨日Eが持って帰った『ぞうさん』(まど・みちお詩、なかがわりえこ選、なかがわそうや絵、年少版こどものとも、福音館、1979、タテ21cmヨコ20cm)がテーブルの上にあるのを見つけて、それを欲しがらる。わたすとすぐに座り込んで、自分でページをめくって見ている。女の子の絵が出ると、「ミンミン！」(自分のこと)と言って、その絵を指で押さえて私の方を見たり、時計の絵を見て「ポーン」と言ったりする。

事例53 <昭和53.12.14 (1歳5か月)>

朝10時過ぎ。自分で『ありくんこんにちは』(板坂寿一作、的場伸幸・よこいだいすけ絵、福音館、1970、タテ15cmヨコ15cm)を出して見ていたが、指をパッとひろげている絵が出てくると「パー」と言って自分の手をひろげ、げんこつの絵が出てくると、「グー」と言って手をにぎる。ひとりでそんなことをしながら『ありくんこんにちわ』を最後までひとりで見ていた。

その後、『ママだいすき』もひっぱり出して見ている。ネズミの絵が出てくると、「チュウチュウ」と私にむかって言う。「そうよ、ちゅうちゅうさんよ。ねずみさん。」と言って聞かせると、うなずく。

事例54 <昭和53.12.14 (1歳5か月)>

4時ごろ。『あいうえお』を、「ウ、ウ」と言いながら私のところへ持って来る。このところM児は、この絵本の中のひらがなで書かれた字に興味をもって、ひとりで見ている時も、字の部分を押さえて「ウ」と言ったり「カ」と言ったりしている。本の初めから1ページ1ページめくりながら、「あ」、「い」、「う」……と言って聞かせると、私の後を追って真似して言う。なかでもM児がいちばん気に入っているのは「う」と「か」で、別のページをめくっている時でも「ウ」と言ったり、「カ」と言ったりする。

夜にも、自分からこの絵本を持って来て字のところを読んでもらいたがる。あ行、か行、さ行をゆくりページをめくりながら読んでやると、自分も意識的に口を大きく動かしながら私について言う。

事例55 <昭和53.12.15 (1歳5か月)>

4時過ぎ。『そらがとびたいねずみくん』(なかえよしを作、上野紀子絵、ポプラ社、1976、タテ18cmヨコ13cm)を読んでもらいたがる。ねずみ君が空を見上げている絵が出てくると、自分も天井に顔を向けて上を見上げる。「そう、お空見てるね」と言ってやると、顔をもとにもどしてうなずく。飛行機の絵が出てくると、「ブーン、ブブーン」と言いながら両手をひろげて飛行機が飛んでるような真似をする。チョウチョウが出てくると「イーラ、イーラ」と言う。私が「そうよ。ひーら、ひーら飛んでったのよ」と言うと、「イーラ、イーラ」と繰り返す。ねずみ君が岩から落ちた絵が出てくると、「ウン、ウン」と、私に何か言って欲しそうにして、その絵を押さえて私を見る。「ドッシーンって落ちたのよ。アイタター」と言ってやると、待ってましたとばかりに、自分も後ろにひっくり返って見せる。何度も読んでもらっている絵本である。今日は、1ページ1ページ、それぞれの絵に対して、豊かな反応を示しながら、私と一緒に読み合うことを楽しんでいた。

事例56 <昭和53.12.21 (1歳5か月)>

朝9時過ぎ。『ともこのあさごはん』と一緒に見てもらいたがる。主人公のくともこの絵を見て、「ミンミン」(自分のこと)と言って自分をさす。クマ、ウサギ、トラ、カンガルーの縫いぐるみ人形の絵を指さし、話してもらいたがる。「これはうさちゃん」「これはくまちゃん」と、絵を指さしながら言って聞かせると、うなずきながら聞いている。絵本の中のくともこの両親を見て、「ターチャン」(お父さんの意)、「カーカ」(お母さんの意)と言う。父親のことを「チャーチャン」と言っていたが、昨日ごろから「ターチャン」となりはじめている。

真っ黒こげのパンや目玉焼きを出されていやな顔をしているくともこを見て、自分から「イヤー、イヤー」と言う。昨日、私がこの絵を見ながら「いやー、いやーって言ってるのよ」と読み聞かせたのだが、それを覚えていて、いかにもいやそうな表情をして「イヤー、イヤー」と言う。

このごろ、絵本の中に描かれている人物や動物の絵で、小さい女の子のような絵を見ると、「ミンミン」(自分の意)と言う。『くまちゃんのいちねん』でも、くまちゃんのお姉さんの絵を見て「ミンミン」、くまちゃんのお母さんの絵をみて「カーカ」、お父さんの絵を見て「ターチャン」と言う。自分や父親や母親に置き換えて絵を見るようになっていく。絵本の世界に入っていき深みというか、自己投影力がうまれてきているらしい。

事例57 <昭和53.12.22 (1歳5か月)>

朝9時ごろ。「シッコ」と言うので、おまるにかけさせると、絵本をとって欲しがると、『ママだいすき』を持たせると、ページをめくりながら、ヒョウの絵が出ると「ウォー」、シマウマの絵が出ると「パッパッ」、ネコの絵に「ニャーン」、サルに「キャッキャッ」と言いながら見る。母ザルが子ザルを抱いている絵をじっと見ているので、「だっこしてるよ」と言う。そばにいる私に抱きつくようにする。人間の母と子の絵のところでは、「ミンミン」(自分のこと)、「カーカ」(私のこと)と何度も自分や私を指さしたり、その絵を指で押さえたりする。結局、おしっこはでないままである。

事例58 <昭和53.12.24 (1歳5か月)>

夕方6時過ぎ。『くまちゃんのいちねん』と一緒に見ている時、火事の絵のところ、窓から吹き上げている炎を指で押さえて、「チィ」と言って私を見る。「そう、あっちいよ。熱い熱いねえ」と言うとうなずく。このページの火事現場の絵については、「熱い」という説明は今まで一度もしたことはなかった。この場面では消防車やその他の自動車についての言及が多かった。今日、M児は、炎の絵に注目して、火についての自分の知識や感覚を動員して、自分から「チィ」(熱いの意)という読み取りをしたのだ。M児はまだ火事は見たことはなく、ガスレンジの炎くらいしか見たことはない。ガスレンジの炎には興味をもって、手を伸ばしてさわってみようとしていたり、おなべを火にかけていると背伸びして見ているが、その度に「熱いよ!」と私から叱られる。すると「チィ」と言ってひきさがると。このような体験をとおして、窓から吹き出す炎をさして「チィ」と言ったのであろう。

1歳5か月における絵本享受の実態と考察

①この期に入ると、M児ひとりでも、絵本に集中して、じっくりその内容を楽しむ姿がよく見られるようになった。〈事例48〉〈事例53〉に見られるように、M児はひとりで絵本と向き合い、1ページ、1ページ開いていきながら、言葉を発したり、動作をしたり、すっかり絵本の世界に心を遊ばせている。

②また、私と一緒に読む場合、〈事例55〉にみられるように、M児と私とで、互いにイメージを交わしあい、楽しさを共有しながら、まさに共同作業のような形で一冊の絵本を読み合うこともできるようになった。M児は自分の読み取ったことやイメージしていることを、動作や未熟な言葉で私に伝えようとし、私はそれをちゃんとした言葉や表現に直して受けとめてやった。また、M児がこう言って欲しいと期待していることを、私の方ですばやく察知して、たとえば、「ドッシーンって落ちたのよ。アイタター」と言うやると、M児は待つてましたとばかり後ろにひっくりかえり、『そらがとびたいねずみくん』の真似をして見せる。それに対して「そうそう、そうやってひっくりかえったのねー」と、受けとめてやる。このような共同作業的なやりとりをとおして、M児は、一緒に読み合うことの楽しさを知っていった。子どもが自分の「読み」を投げかけてきた時、周りの大人が、しっかりとその「読み」を受けとめ、共感しながら、補足しながら、一緒に楽しんでやるのが大切である。子どもは人と共感し合うことの楽しさをとおして、絵本への愛着をさらに深めていくと思われるからである。

③1歳5か月になって、M児の絵本の読み取りに、興味深い傾向が現れた。それは、絵本の登場人物(動物もふくめて)の絵を、自分自身に置き換えたり、自分の父親や母親に置き換えたりして見はじめたことである。

〈事例49〉では、『とこちゃんはどこ』を私と一緒に読んでいて、くともこちゃんの父親の絵を見て、「チャーチャン(自分の父親のこと)」と言って、自分の父親の部屋を指さす。〈事例52〉では、初めて手にした『ぞうさん』という絵本を開いて、女の子の絵を見て、「ミンミン(M児自身のこと)」と言う。

〈事例56〉では、『ともこのあさごはん』を私と一緒に読んでいて、主人公のくともこ(幼い女の子)を見て「ミンミン」と言って自分をさす。また、くともこの両親を見て「ターチャン(自分の父親のこと)」「カーカ(自分の母親のこと)」と言う。また、『くまちゃんのいちねん』でも、くまちゃんのおねえちゃんの絵を見て「ミン

ミン」、お父さんの絵を見て「ターチャン」、お母さんの絵を見て「カーカ」と言う。

〈事例57〉では、『ママだいすき』を自分で読みながら、人間の母と赤ちゃんの絵を見て、「ミンミン」「カーカ」と言って、何度も自分や私を指さす。

以上のように、M児は、絵本の中に描かれている女の子を見ると「ミンミン」と言って自分を指さし、父親や母親の絵を見ると、「ターチャン」「カーカ」と言って、父親や母親を指さした。絵本の中の女の子や両親を、自分や自分の両親に置き換えて絵本を見るようになったのである。

実は、私は、M児に早くこのような読み方をさせたくて、1歳4か月の〈事例46〉に見られるように、『あかずきん』を読んでやりながら、〈あかずきん〉をさして「これみーちゃんよ」と言って聞かせたのである。そしてページをめくりながら、次々に〈あかずきん〉をさして「これは、だれ?」と聞くと、M児は全部「ミィミィ」(この時はまだ「ミンミン」と言えなかった)と答えている。だが、最後にもう一度「ミィミィはどこにいるの」と聞いたところ、M児は自分の鼻をおさえたのである。結局、私の意図するところは十分に理解されていなかった。このあとも同じことをしたかどうかは、記録にないのでわからないが、この時から二十日あまりたって、M児は、

〈事例53〉のように、初めて手にした絵本の女の子の絵を見て自分から「ミンミン」と言ったのである。私の誘導的な読み聞かせが影響しているかもしれないが、1歳5か月になって、M児は、いろんな絵本に出てくる女の子をどれも「ミンミン」だと自分から言うようになった。女の子の絵に自己を投影することができるようになったことがわかる。

子どもが絵本を読む楽しみの一つは、自分が主人公になったつもりで、その絵本の世界に身を置き、心の中で主人公と同じ体験をすることだといわれている。それが可能となるのは、主人公に我が身を置き換える自己投影力が十分に育ってからのことであろう。その自己投影力が、いつごろからどのような形で育っていくかを知る上で、これらの事例は、たいへん示唆に富んだものといえる。

三歳・四歳のころ、M児は、『三びきのやぎのがらがらどん』や『さんまいのおふだ』のヤギや小僧になりきって「ごっこ遊び」を楽しんだものである。自分が絵本の主人公になりきる出発点は、絵本の中の女の子の絵を「ミンミン」だと言い始めたこの時期だと言ってよいだろう。

④ 〈事例51〉〈事例54〉に見られるように、『あいうえお』という絵本の「文字」の方にも興味を示した。

これまでM児は、この絵本の絵を見て楽しんできたのだが、私が文字の方をさして「あ」と教えたら、M児も、「ア」、「イ」……と、私のあとについて言うのをおもしろがるようになった。当時我が家によく遊びに来ていた就学前後の子どもたちが、この絵本を出しては、文字を読んだり書いたりしているのをM児がそばで見ていることも、M児の興味を強めたと思われる。この『あいうえお』の絵本では、絵に主体をおいた今までの読みとは違った、文字に主体を置いた読みができることに気づいたことは、M児にとって、夢中になれるほどの新しい発見であった。この時点では、ほかの絵本に書かれている文字にはまだ関心がなかったが、この体験をきっかけに、文字への興味と関心が深まるように思われた。

⑤ 〈事例58〉については、すでに1歳4か月の②の最後のところで取り上げたので、ここでくわしくは触れないが、それまでの生活体験の広がりや絵本体験の積み重ねによって、絵本の絵を読み取る力がかなりついてきたことがわかる。1歳児・前半期をとおしてM児が身につけてきた読みの力が、一つの結実を見せている事例である。

おわりに

以上、M児の育児記録から、1歳児・前半期(1歳0か月～1歳5か月)における絵本に関する場面・事例を取り出して、絵本享受の実態と、その考察を試みてきた。

私たちがこの考察をとおして、感動をもって確信できたことは、絵本は、0歳、1歳の子どもにとっても、大きな喜びや楽しみをもたらすものだという点である。その具体的な内容については、各章の考察でくわしく述べているのでくりかえさないが、0歳期から絵本絵本の読み聞かせをしてきた場合、1歳児・前半期ではどのように絵本を享受できるようになるのか、その特徴的な傾向を明らかにできたのではないかと、思われる。同時に、0歳児・1歳児の子どもに絵本を読み聞かせることに、どのような意味があるのか、絵本がこの時期の子どもたちに何をもちたらすのか、といった課題を研究していく上での、基礎的な研究資料を提供することができたのではないかと考えている。

(本研究については、野地潤家先生に貴重なご助言を頂きました。記して感謝申し上げます。)